

北海道民放クラブだより

東日本大震災復興支援

沢井貴良子朗読会

50年に一度の大雨に襲われ次々と7カ所の堤防が決壊、泥水に流される家の屋根の上で、自衛隊へりに助けを求める夫婦、濁流の中、電柱にしがみつく男性、テレビは災害の恐ろしさを同時刻で壮絶なまでに伝えました。

災害は忘れたころにやってくる：といいますが、東北を襲う災害は、記憶にまざまざと新しいうちに次々とやってきました。

社会活動部会の沢井貴良子（HBC）さんは4年前の東日本大災害のあと、震災被害を受けた子供たちに義捐金を贈るため、毎年、



カンテレ演奏バックに朗読する沢井さん

朗読会を続けてきました。

昨年も、9月9日午後1時から、

秋の気配が漂い始めた札幌市中央公園の北海道道立文学館で、「東日本大震災復興支援、沢井貴良子朗読会」を開催しました。共演はヒューマンドキュメント『命の記憶』で芸術大賞を受けた安藤千鶴子さんとフィンランドの民族楽器カンテレ演奏家のあらひろこさん。

会場いっぱい130人の観客の拍手に迎えられる、プログラムは進みました。

沢井貴良子さんは『馬を洗って（加藤多二）』と『うた時計（新美南吉）』を朗読、表現豊かな、しっかりと語った語り口で皆魅せられていました。語りを盛り上げる魅力的なカンテレの響きがこたえます。合間に、遅々として進まない復興の悲しみを伝える詞と作文『かぜのでんわ（被災地より）』の朗読です。

淡々とした中に安藤千鶴子さんの溢れんばかりの情感が伝わります。聞いている人たちの中にはハンカチを手にする姿も見られました。朗読会で集まった義捐金は被災

地の子供たちに贈られました。

カラオケの会

毎月第3火曜日

唄うことが大好きで、一人で唄うより大勢の前で歌うほうが楽しいと感じる人の集まり「カラオケの会」。そんな仲間が、毎月第3火曜日の午後3時、ススキノに程近いミュージック・パブ「ジョージの城」で唄っています。

「カラオケの会」では、いつでも会員を募集しています。カラオケに興味のある北海道民放クラブ会員の皆さん、ぜひ仲間になりませんか!!

唄って、飲んで、仲間との会話も弾みます。



カラオケで熱唱

セピア色が語る札幌のバス



STV出身の長南敏雄さんが2冊目の本『セピア色した札幌のバス』を昨年6月に出版した。

序書きで長南さんは、札幌のバスについての書籍が少ない、札幌のバスの歴史を調べていたら知られていない事実を沢山見つけたので、記録として残そうとしたという。

本の内容は、乗合自動車の始まりから、青バスを買収した市営バスの路線拡充、戦時下のガソリン不足時代、木炭車、昭和22年からの電気バス、私鉄バスとの競争、JRバス等への移行。

平成16年に74年の歴史を終えた市営バスの歴史や関係した人々、第2次世界大戦等の時代背景も織り込まれている。

寄贈された本は北海道民放クラブで、ご希望の方に貸し出します。